ISSN 2436-5408 (Online)
ISSN 1346-2601 (Print)

歴史的都市の氏子区域に関する考察
――中近世の飛騨高山を事例として――

本多　健一（大阪観光大学）
E-mail　hondak@fc.ritsumei.ac.jp

要旨

日本においては、それぞれの土地の守り神（氏神）を祀る神社があり、当該地域共同体の住民はその氏神と神社を崇敬し、支える氏子となっている場合が多い。よって氏子がまとまって居住する、氏子区域という宗教的な領域が形成されている。本稿では個別事例として岐阜県高山市の氏子区域を調査して考察した。その結果として、中近世における都市の歴史に関していくつかの新知見を明らかにした。

abstract

Every area in Japan houses a shrine where a guardian deity *(ujigami)* is worshiped. Residents living in regional communities revere the deity and the shrine, and in many instances, they provide support as parishioners *(ujiko)* to the place of worship. Due to this practice, there are religious locations known as parishioner areas *(ujiko-kuiki)* where such groups of supporters reside. This paper examines the *ujiko-kuiki* of Takayama city, Gifu Prefecture as individual case studies. As a result of its investigation, this paper identifies some new facts with regard to medieval and early modern urban history.

Ⅰ　はじめに

日本においては、都市でも村落でも伝統的にその土地の守り神として氏神（産土神）といわれる神を祀る神社があり、当該地域共同体の住民は世代を越えて氏神を崇敬し、神社を支える氏子となっている場合が多い。よって都市・村落ともに、氏子がまとまって居住する、氏子区域という宗教的・民俗的な空間ないし領域が形成されている。民俗学の萩原龍夫は、このような神社と地域社会（およびその住民）との間に結ばれている制度的慣行を「氏子制」と呼び、その特徴として、おおむね一つの地域共同体に一つの氏神神社が対応していること、当該神社の周囲に氏子がまとまって居住する氏子区域が形成されていることなどを指摘している[1]。

このように古くから地域共同体と密着した氏子区域のあり方は、中近世から近現代に至るまでの都市や村落の歴史・空間を考察する際の重要な着目点となりえよう。特に歴史のある都市（歴史的都市）では、複数氏神の氏子区域がモザイク状に形成されていることも多いため、それらの空間構造や成り立ちを分析していけば、市街地の歴史的な形成・変容プロセスの一端を明らかにしうると思われるのである。

ところが、歴史学（文献史学）・歴史地理学・建築史学などにまたがる既存の都市史研究において、氏子区域という空間の問題をとりあげた研究はきわめて少ない。また、それらの先行研究も、地域や時代が限定された単発的な考察がほとんどである[2]。よって都市における氏子区域の研究とは、これらの関連学問分野にとって大きな未開拓の分野ということができるのではないだろうか。

本研究の目的は、以上述べてきた背景を踏まえ、歴史地理学の立場から都市にお

ける氏子区域の空間構造や成り立ちなどの考察を行うことによって、都市史研究における新知見の獲得および新領域の開拓をめざすものである。ただし、すでに氏子区域という概念をめぐる基礎的な事項の検討、例えば用語の問題、歴史的な形成・変遷の概観、信仰圏研究との関係、それに海外の動向[3]などは別稿として発表予定であるため[4]、本稿ではより個別の事例として、近世の城下町として成立した飛騨国高山（岐阜県高山市）を対象とし、その氏子区域の実態を調査・地図化・分析して、文献史料などでは明らかにしえなかった過去の都市形成などの一端を解明することとしたい。

Ⅱ　高山の氏子区域とその考察

1　高山の歴史と都市空間

高山市は岐阜県北部に位置し、二〇一五年現在の面積は2，177km2、人口は約89，000人である[5]。その中心となる市街地は、日本海へ注ぐ宮川（神通川）両岸にある、標高約600メートルの高山盆地に形成されている（以下、「高山」とはこの市街地を意味する）。

高山は古くから飛騨国の政治・経済・文化の中心であり、奈良時代には国分寺も建立されていた。その後天正一四年（一五八六）、飛騨三万三千石の国主として入府した金森長近は、翌々年から高山城および城下町の建設を開始し、これによって現在に至る高山の基礎が築かれたが、元禄五年（一六九二）、金森頼時の出羽国上ノ山（山形県上山市）転封によって六代一〇七年間続いた金森氏の高山支配は終了している。金森氏による城下町は、高山城の北側、宮川と江名子川で囲まれた範囲を中心に建設され、宮川東岸に形成された河岸段丘の最も低い部分に一之町・二之町・三之町などの町人地、崖で隔てられた「空町」といわれる地区に武家地、その上の東山山麓に寺社地が配され、東西方向の高低差を利用した明確な区割りがなされていた（第1図）[6]。ちなみに金森氏転封直後、元禄八年の人口は3，757人であった。

次いで飛騨国は幕府直轄領（天領）となり、高山城は破却されて、宮川西岸におかれた郡代役所（高山陣屋）が新たな支配の拠点となる。また、武家屋敷も町人に払い下げられて田畑や町人地に変化した一方、一八世紀から一九世紀にかけては宮川に沿った西岸や江名子川の北側にも市街地が拡大していった。この時代、高山では豊かな山林資源を背景として経済力を蓄えた町人を中心に、豪華絢爛な高山祭の屋台に象徴される文化が花開き、現代にも受け継がれている。なお、幕末期の嘉永六年（一八五三）の人口は10，190人であった。

その後、高山の近代化に大きな影響をおよぼしたのが昭和九年（一九三四）の国鉄高山本線および高山駅の開業である。これにともなって、現在のように高山駅付近にも市街地が拡大し、昭和一一年には市制を施行するに至った。

2　氏子区域の特徴と近世の都市形成

現地聞取りおよび文献調査[7]によって、現在の高山の氏子区域は第2図のように地図化される。また、明治六年（一八七三）の『斐太後風土記』には、当時の高山における氏子区域のおおまかな範囲が示されており[8]、現状と比較した結果、高山陣屋周辺の一部町々を除けば大きな変化はなかったため、近世以前に形成されて引き継がれてきたことは間違いない。

さて第2図からわかる特徴は、第一に高山は城下町として比較的小規模な町でありながら[9]、その中で多くの小地域ごとに異なる氏神の神社が崇敬され、氏子区域が複雑に細分化されている点といえよう[10]。最初に城下町が建設された宮川東岸の旧市街地に限れば、東側の旧武家地ではおおむね東山白山・東山神明・錦山の三社、西側の旧町人地では安川通を境にして日枝神社・桜山八幡宮の二社（後述する東山白山神社の飛地は例外）と合計で五社に細分されている。後に拡大した市街地では、五社に加えて飛騨総社・一本杉白山神社の氏子区域ともなった。なぜこれだけ細かく分かれているのか、その理由を検討していくと、以下に述べるように、近世初期の領主であった金森氏が主導して人為的に制定された可能性が高いと考えられる。

まず近世・近代の地誌などから、一七世紀高山の氏神であった五社の由緒をまとめると第1表のようになる。いずれの神社も近世城下町建設以前から何らかの形で高山ないしその周辺にあったようだが、八世紀に創祀された伝承をもつ東山白山神社を除く四社は、一六世紀末から一七世紀にかけて金森氏によって復興されたことがみてとれよう。

例えば町人地の氏神については、『斐太後風土記』によれば、南側の日枝神社は天正年間（一五七三～九二）末に現在地より南にあった旧片野村から遷座された[11]。また延享年間（一七四四～四八）の『飛州志』および『斐太後風土記』によると、北側の桜山八幡宮は、元和九年（一六二三）、江名子川から神像が発見されたことを契機に復興されたという[12]。つまり、いずれも城下町建設に際して、金森氏によって創建さ

れた神社と考えてよいであろう。特に日枝神社については、元の鎮座地（高山市片野町五丁目）に「元山王」と呼ばれる小社が現存することから、この伝承は史実と認められる。また、安川通を境界に町人地の氏子区域が南北に分かれていた実態は、延享三年（一七四六）の『飛騨国中案内』によって確認できるが[13]、『斐太後風土記』によると、これらも金森氏によって定められたとしている[14]。

一方、旧武家地については関連する記録が少ないものの、先に述べた通り、高山が天領となった後で武家屋敷群は解体され、跡地は町人に払い下げられた経緯がある。にもかかわらず旧武家地と旧町人地とで氏神が異なっているということは、金森城下町時代には両地の氏神と氏子区域が定められて確定し、その記憶が保持されたまま存続している可能性が高いと思われる[15]。

以上のように、高山城下町における氏神や氏子区域に対する金森氏の積極的な関与は、おおむね史実と考えられる。おそらく一七世紀前半の頃、金森氏は入府以前からあった地元の神社を尊重しつつ、それらを復興・再編しながら氏神の選定や氏子区域の区分けを人為的に制定することで、みずからの目指す城下町を建設していったといえよう。

しかし、それではなぜ金森氏が氏神・氏子区域をこのように定めたのか、そこにいかなる意図が込められていたのだろうか。例えば武家地と町人地の氏神が分かれているという事実からは、それによって精神的に近世身分制の固定化を図ったことなどが推測される。ところが、筆者がこれまで調査した限りでは、両地の氏神が明確に異なる近世城下町は他に若狭小浜（福井県小浜市）しかなく、高山と同じように領主権力の氏神・氏子区域制定への関与が指摘されている福岡や、金森氏が建設した越前大野（福井県大野市）、美濃上有知（岐阜県美濃市）でもそのような実態は見出されていない[16]。まだ事例が限られているものの、現時点において両地の氏神が分離されている近世城下町は少数派であり、よって先の問に対する明確な解答は今後の課題とせざるをえない。

ただ、金森氏による人為的な制定の結果として確実に指摘できる点は、特に町人地の氏神が二社に分けられたために、江戸中期の一八世紀以降、両社の氏子が担う祭礼（日枝が春の高山祭、桜山八幡が秋の高山祭）同士での競い合いを生み、屋台をより華麗にするなど今に至るまで高山祭の賑わいの原動力ともなっていることは間違いないであろう[17]。

3　氏子区域からみた中世以前の集落

ところで、金森氏の城下町建設以前、すなわち中世の高山はいかなる様相であったのだろうか。これについても、その氏子区域のあり方を手がかりにして探ってみたい。第2図をみると、高山の中で東山白山神社の氏子区域だけが特異な形態をしていることがわかる。すなわち同社の氏子の多くは神社周囲の鉄砲町・若達町・大門町（旧武家地）に在住するが、なぜか西に離れて安川通および宮川に面した下三之町（旧町人地）の一部だけが飛地になっているのである。現在でも毎年五月四日・五日の祭礼においては、同神社から神輿などが当地へ渡御してきている。

この理由として考えられるのが、養老四年（七二〇）に勧請・創祀された東山白山神社は、金森城下町以前は現在の安川通付近に鎮座し、当時「安川村」と呼ばれていた高山全戸の氏神であったという伝承である[18]。さらに下三之町の飛地は、かつて白山神社が同町の地に鎮座していたなごりという説もある[19]。このうち後者の説に関しては、金森時代中期（一七世紀なかば）の城下町を描いた「飛騨高山絵図」[20]によると、三之町がその東にある一之町・二之町に対して「新町」とされているため、中世以前の同町付近は宮川の河原であった可能性を示唆していよう。そのような地に白山社が勧請・創祀されていたとは考えにくく、同社の旧鎮座地は安川通と高山別院（照蓮寺）参道との辻付近とみるのが妥当といえる[21]。

その一方で、東山白山神社が江戸前期に町人地の氏神と定められた日枝神社や桜山八幡よりも古い神社であることは確かであり、その氏子区域が飛地として現存していることは、城下町建設前の中世安川村が安川通付近に形成され、同社を氏神としていた明確な証左とみなせよう。

4　氏子区域からみた近世幕末期の町人の紐帯

最後に、このようにして形成された氏神や氏子区域が、後世の高山町人の精神生活に与えた影響を考えてみたい。そのヒントとなりうるのは、幕末期の弘化年間（一八四四～四八）に組織されていた火消組である（第2表）。近世以降の高山は何度も大火に見舞われており、火災対策はきわめて重要な都市生活の課題であった。そのことは、今でも高山の各町ないし町内各組ごとに火伏せの神である秋葉神の祠が祀られていることからも理解できる[22]。

当時の防火対策として組織された火消組は当初七組、その後一〇組となったが、それらの内訳と氏子区域との関係をみてみると、明らかに同じ氏神（当時は七社）を

崇敬する町々が集まって各火消組を構成していたことがわかる。特に歴史が古い宮川東岸では火消組と現在の氏子区域が一致し[23]、宮川西岸でも高山陣屋周辺の町々で「いろは組」「馬頭組」に入り組みがある以外は、おおむね氏子区域を基礎に火消組が組織されている。宮川西岸のこれらの町々では、氏神をたびたび変えているためにこのような入り組みが生じていると考えられるが[24]、他の地域の事例を敷衍すれば、当初は同じ氏子町同士で「いろは組」「馬頭組」が結成されていた可能性もありうるであろう。

近世都市社会の中で最も重要な組織といえる火消組が、同一の氏神を戴く町同士が集合して結成されていた事実は、一七世紀前半の江戸前期に醸成された氏神への信仰が、十九世紀前半の幕末期でも高山町人の強い精神的紐帯として機能していることを物語っていよう。また現代でも、先に述べた高山祭をはじめ、氏子区域単位で氏神神社の祭礼が盛んに行われており、氏神を介しての住民同士の絆は健在といえる。

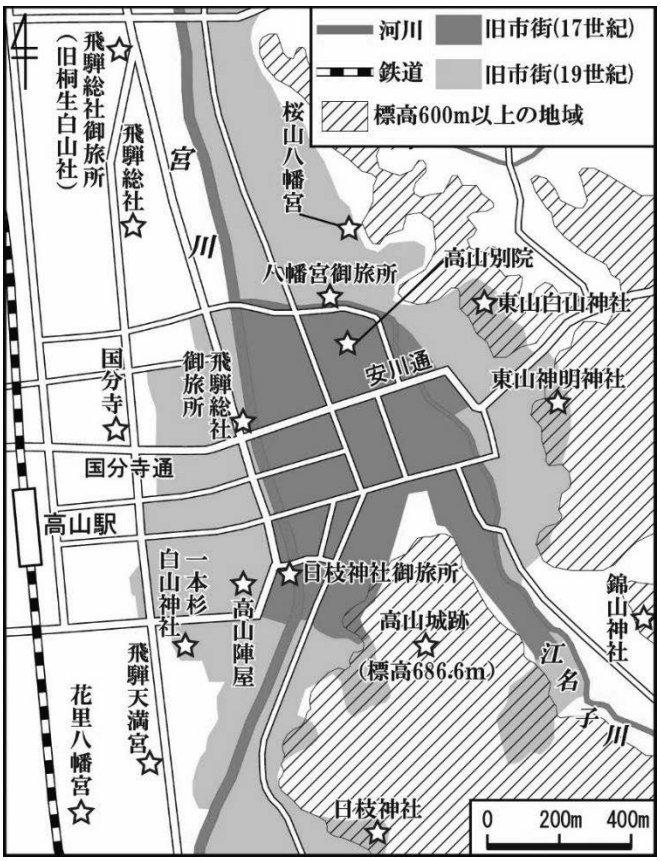
Ⅲ　おわりに

本稿では歴史的都市である飛騨国高山の氏神・氏子区域を対象として、調査・把捉・地図化を行い、その空間構造や成り立ちを分析・検討した。この結果、中世以前の集落の様相、近世城下町の形成過程、そして現代まで引き継がれている住民の精神生活への影響など、従来の方法では見出しえなかった都市史に関する知見を得ることができた。それゆえ本稿で行った分析・検討手法を他の都市でも応用していけば、得られる知見は豊かなものになっていくと考えられる。

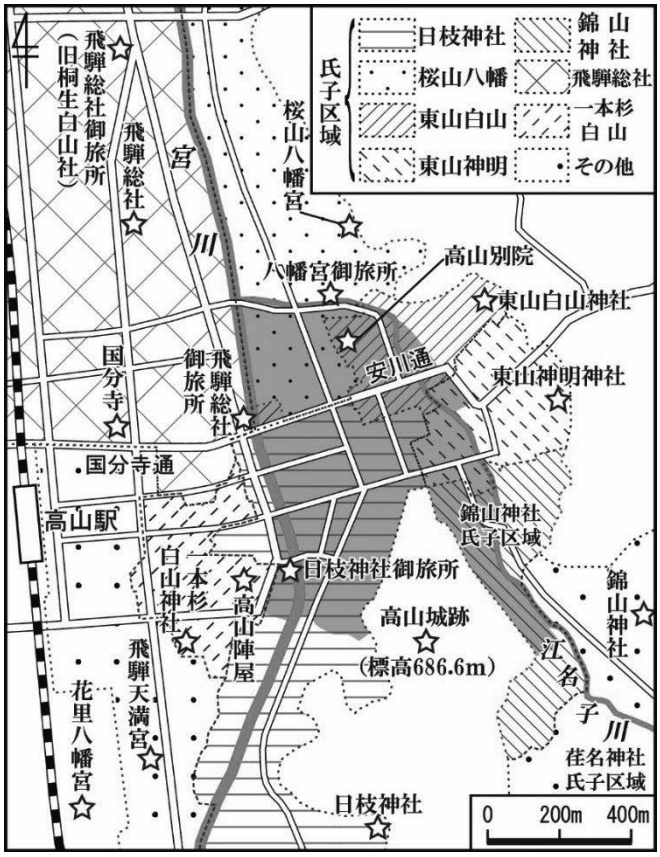
一方で、今後取り組むべき課題としては、第一によりさまざまな都市の事例を数多く調査し、集積させていかなければならない。第二に、その過程で過去における氏子区域のあり方や変遷を把捉・復原・分析する方法の精度を高めていく必要もあろう。また事例が集積されれば、一段進んでそれらを分類・比較し、類型化や一般法則の抽出といった体系的研究の構築にも力を注ぐべきであろう。さらに高山で秋葉神の祠を指摘したように、氏子区域よりも狭小な町単位で信仰している多数の小祠などに着目して、都市における信仰の重層的構造を見出すことも重要といえる。

都市における氏子区域の研究とは、実質的に未開拓の分野であるため、今後それによって切り開かれる領域は大きな可能性に満ちているのではないだろうか。

〔付記〕
本稿の内容は、二〇一九年人文地理学会大会にて発表した。



第１図　高山の地域概観図　　出所:25,000 分の1地形図を基図とし、旧市街地は高山市教育委員会(2012)などより作製



第２図　高山の氏子区域地図　　出所:氏子区域は筆者調査より作製、その他は第１図と同じ

第1表　17 世紀(江戸前期)の高山市街地における氏神神社

神　社	由　緒	主な典拠
東山白山神社	養老 4（720）に勧請・創祀，金森氏城下町建設以前の高山の氏神か，雲龍寺の鎮守社	『飛州志』『安河記』『白山廟記』
東山神明神社	元和年間（1615-24）に金森出雲守（可重か重頼かは未詳）が復興，それ以前は不明 天照寺の鎮守社	『飛騨国大野郡史』「大野郡神社明細帳」
錦山神社	慶長年間（1596-1615）に金森可重が復興	『飛騨国大野郡史』「大野郡神社明細帳」
日枝神社	永治元（1141）に勧請・創祀，かつては大野郡灘郷片野村の氏神であったが，天正年間（1573-92）末に金森長近が現在地へ遷し，城鎮守および市中氏神とする	『斐太後風土記』
桜山八幡宮	大永年間（1521-28）の勧請・創祀か 元和 9（1623），金森重頼が復興	『和漢三才図会』『飛州志』『斐太後風土記』

出所：各種史料より筆者作成

第 2 表　19 世紀(幕末期)の高山における氏神・氏子区域と火消組

	氏　神	氏子区域旧町名（括弧内は現町名）		幕末期の火消組	
宮川東岸	錦山神社	空町一円	堀端町・島川原町・宗猷寺町・春日町	東　組	東　講
	東山神明神社		天性寺町・吹屋町・愛宕町		愛宕講
	東山白山神社		鉄砲町・若達町・大門町		白山講
	桜山八幡宮	安川通以北 三町・寺内町（以上は下一之町・下二之町・下三之町），三新町（一之新町・二之新町・下新町を経て大新町 1～5 丁目），八幡町		秋葉講	
	日枝神社	安川通以南 三町（上一之町・上二之町・上三之町），片原町，神明町		神明講	
宮川西岸		川原町・中町・西町（以上 3 町は上川原町・川原町・西町）		馬頭組	
		上向町（本町一丁目），向町（本町二丁目）		いろは組	
	一本杉白山神社	浦町（有楽町）		馬頭組	
		八軒町		いろは組	
	飛騨総社	下向町上（本町三丁目）		西　組	
		下向町下（本町四丁目）		と　組	
		町方（近世高山町に付属していた相生町・花川町・末広町・朝日町を中心とする地区）		輪　組	

出所：氏神・氏子区域は筆者現地調査など，火消組は高山市(1953)による。 注：カッコ内は現在の町名。火消組のうち、弘化年間(1844～48)の東組はその後 3 つに分かれる。文久元年(1861)には「白山講」の存在が確認できる(高山市 1953)。

［注］

1) 萩原（一九六二）、四三一～四三四頁など。

2) 都市の氏子区域をとりあげた主な先行研究として、京都では①黒田（二〇〇四）、②本多（二〇一五）、大阪では③近江（一九九一）、江戸・東京では④伊藤（二〇〇四）、⑤小南（二〇一七）、博多・福岡では⑥西田（一九九七）、⑦佐伯（二〇一二）などがある。

3) 海外において氏子区域と類似した宗教的空間としては、キリスト教、特にローマ・カトリックや聖公会の教会が布教や宗教上の監督のために設定した教会教区（英語ではparish）がある。それらの研究としては、例えば英国全土を対象にしたA. Winchester（2008）などがある。

4) 二〇二一年一二月現在、当該拙稿は別誌に投稿済で査読中である。

5) 高山の現状は、高山市公式ホームページ http://www.city.takayama.lg.jp（二〇二一年一二月一日閲覧）などを参照した。また高山の歴史については、①高山市編（一九五二～一九五三）、②奈良国立文化財研究所編（二〇〇五）、③高山市教育委員会編（二〇〇七）などを参照した。

6) 高橋ほか（一九九三）、一六八頁。

7) 現地聞取り調査は二〇一七年二月および五月に実施した。文献調査は土田ほか（一九八七）などによる。

8) 蘆田編（一九一五）。例えば桜山八幡宮の項では「祭神八幡大神　本社、拝殿　祭礼八月朔日　氏子　高山三町とも安川以北、一二之新町・大新町・八幡町・縄手・両寺内町」八八頁とある。

9) 前掲5）②、二八頁。

10) 筆者調査の限りでは、萩（山口県萩市）や赤穂（兵庫県赤穂市）のように旧城下町全域が一氏神という町もある。

11) 前掲8）、四五～四六頁。

12) ①岡村編（一九〇九）、七七頁、②前掲8）、八八～八九頁。

13) 岡村（一九八七）に以下のようにある（括弧内は筆者による）。「山王権現宮（中略）此山王は高山三町の内半分より上の氏神なり、祭礼等も三町より相勤事なり」二二頁および「八幡宮（中略）右八幡山長久寺は高山町の内八幡町の上、山の麓に御座八幡宮なり、氏子の義は高山三町の内、本町通にて、文右衛門坂通り安川横町を切て、本町三筋、其外一ノ新町・二ノ新町・八幡町・寺内町・下新町、此分不残八幡の氏子なり」一六六頁。

14) 前掲8）。日枝神社の項には「城中鎮護、又城下町々の産土神たるべしと命ぜられし」四六頁、桜山八幡宮の項にも「高山里の御民、安川大路より北なる家々を此宮の産子と定玉〈りとぞ〉」八九頁とある。

15) ただし、旧武家地の大部分はいったん開墾されて田畑となり、江戸中期頃から再び少しずつ宅地化されていったようなので、そういった特殊事情に留意する必要もあろう（奈良国立文化財研究所編（二〇〇五）、三〇頁および高山市教育委員会編（二〇〇七）、三九〇～三九二頁）。

16) 福岡については前掲2）⑥参照。小浜や大野、上有知、それに前掲10）の萩や赤穂などの事例は別稿を準備中である。

17) 谷川編（一九八七）、九八頁。

18) ①加納東阿『安河記』、文政七年（一八二四）（田中編（一九二五）、八六六～八六九頁）、②赤田臥牛『白山廟記』（赤田（一八二七））、③高山市編（一九五三）、一九四頁など。

19) 前掲7）、四二九頁。

20) 高山市教育委員会編（二〇一二）、四～五頁。

21) 浅野（一九八六）、六・一二～一三頁。

22) 例えば高山において一〇〇軒以上の家が焼失した火災は、近世だけでも享保一四年（一七二九）、天明四年（一七八四）、寛政八年（一七九六）、天保三年（一八三二）二回、合計五回の記録がある（高山市編（一九五三）、五八二～六二七頁）。高山の秋葉信仰については、高山市教育委員会編（二〇一四）、二一八～二三〇頁などを参照。

23) ただし、東山白山神社氏子区域の飛地である下三之町の一部がどの火消組に属していたかは明らかでない。推測の域を出ないが、地理的な制約もあるので、他の桜山八幡宮の氏子町とともに秋葉講に属していたのではないだろうか。

24) 前掲7）、四一一頁および前掲8）、五一～五二頁など。

［引用文献］

赤田臥牛『臥牛山人集初編巻之八』、菱屋治兵衛、一八二七（岐阜県立図書館蔵）

浅野吉久『飛騨高山　安川物語』、私家版、一九八六

蘆田伊人編『大日本地誌大系第七冊　斐太後風土記　上』、大日本地誌大系刊行会、一九一五

伊藤裕久「江戸・東京の祭礼空間―伝統都市の分節構造―」、『年報都市史研究』、二〇〇四、一二号、一九～三一頁

近江晴子「大阪天満宮の氏地の拡大と坐摩神社との相論」（大阪天満宮史料室編『大阪天満宮史の研究』、思文閣出版、一九九一）、一二三～一七一頁

岡村利平編『飛騨叢書第一編　飛州志』、住伊書店、一九〇九

岡村利平校訂『飛騨国中案内』、かすみ文庫、一九八七（初版は一九一七）

黒田一充『祭祀空間の伝統と機能』、清文堂出版、二〇〇四

小南弘季「明治初頭における氏子域の成立―明治東京の氏子域に関する復元的考察（その1）」、『日本建築学会計画系論文集』、二〇一七、第八二巻、七三五号、一三五九～一三六五頁

佐伯弘次「中世都市博多の総鎮守と筥崎宮」、『史淵』、二〇一二、一四九号、一～二〇頁（初出は一九九七）

高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』、東京大学出版会、一九九三

高山市編『高山市史』上下巻、高山市、一九五二～一九五三

高山市教育委員会編「高山 旧城下町の町並み―下二之町・大新町地区伝統的建造物群保存対策調査報告」(長野県須坂市教育委員会・楢川村町並み文化調整課・高山市教育委員会編『日本の町並み調査報告書集成第22巻 中部地方の町並み7』、海路書院、二〇〇七)、三七七～四九六頁(初版は二〇〇三)
高山市教育委員会編『高山城下町絵図 江戸～昭和時代』、高山市教育委員会、二〇一二
高山市教育委員会編『高山市史 建造物編下』、高山市教育委員会、二〇一四
田中貢太郎編『岐阜縣飛騨國大野郡史 中巻』、升重書店、一九二五
谷川健一編『日本の神々―神社と聖地 第九巻 美濃・飛騨・信濃』、白水社、一九八七
土田吉左衛門・今井一郎・谷田勉・牛丸親重・熊崎善親編『飛騨の神社』、飛騨神職会、一九八七
奈良国立文化財研究所編「高山―町並調査報告―」(奈良国立文化財研究所・岐阜県岩村町・三重県鈴鹿郡関町編『日本の町並み調査報告書集成第8巻 中部地方の町並み5』、東洋書林、二〇〇五)、一九～一六〇頁(初版は一九七五)
西田博「福岡城下町の建設と村落・神社の移転」、『日本歴史』、一九九七、五九三号、三五～四八頁
萩原龍夫『中世祭祀組織の研究』、吉川弘文館、一九六二
本多健一『京都の神社と祭り―千年都市における歴史と空間』、中央公論新社、二〇一五
Winchester, A., *Discovering Parish Boundaries*, Shire Publications, 2008